



図2 グラン・カン（ジェノヴァ図 部分）

Rex camf[b]alech · hoc est magnus canis カンバレク王、これマグヌス・カニスなり

（後半）

彼を尋問した多数の人物の求めに応じてなされた  
 インディアならびに東方の国全体の人々の暮らしと風習についての  
 ニコロ・ディ・コンティの報告

40 三つの部分へのインディアの分割、どれが最も豊かで文明的か、その風  
 習について、その他いくつかの地の注目すべき事柄について

インディアは、全体が三つの部分に分かれる。第1はペルシャからインダス川  
 まで、第2はその川からガンジス川まで、第3はその川から向こうで、暮らし・  
 統治・風習において我らに似ていることからして、これが最も良く豊かで文明  
 的である。同じく、我らのごとく綺麗な部屋のある大きな家、上手く造られた

洗練された調度品を有している、とても文明的に暮らし、野蛮人のあらゆる残酷さや非人間的な生とは無縁で、温厚・寛容で慈悲深い人々である。商人で、そのうち最も裕福な者は、その数は多いからたとえて言えば、自分の財産を商船に積むと1人で40隻分にもなり、その1隻分は5万ドゥカーティの値打ちがあるだろう。上に述べたこのインド人だけが、我らと同じく、テーブルクロスをついた背の高い卓で食事する習わしで、様々な飲み物や他のものに銀の杯を用いる。というのは、他のインド人はみな地面に敷いた絨毯あるいは床の上に座って食べるからである。葡萄酒も葡萄の樹もないが、米を搗いて水で溶き、その中にさる樹の汁を入れる。するとちょうど葡萄酒のように赤くなる。タプロバーナ島では、タルという木の枝を切って下に壺を宛がっておくと、その中にとっても味よく甘い液がしたたり落ち、彼らはふだんそれを飲む。インダス川とガンジス川の間湖が一つあり、その水は素晴らしく美味で、皆喜んでそれを飲む。近隣全てのみならず遠くの地域もこの水を汲みに人を寄越し、道にはそれを運ぶための軽快な馬がたくさんいて、そのため彼らは毎日新鮮な水を手に入れることができる。小麦もそのパンもないが、ある種の小麦粉はある。米・乳・チーズ・肉を常食する。雌鶏・雄鶏・雉・鶉その他野鳥がいっぱいいる。猟を大いに楽しむ。髭は蓄えないが、長い髪の毛を肩まで垂らしている。我々がするのと同じように床屋に通い、戦に行くときは、髪を絹紐で首の後ろに束ねる。背の高さや寿命も我らと同じである。彼らの寝台は全て金細工が施してあり、ベッドカバーは豊かに刺繍がしてある。着るものは地域や土地によって様々である。一般に羊毛はなく、亜麻・綿・絹が大量にあり、男も女もそれで衣服を作る。恥部の回りを膝までの長さの何か亜麻の腰巻きで覆う。その腰巻きの上に、男は膝まで女は踝までの布か絹の服を一枚纏う。それ以上は、この国の大変な暑さからして着られない。足には、古代の大理石の彫像に見られるような一足の草履しか履かず、それぞれ身分に応じて絹か金の紐で結んである。いくつかの地方では、女は金や絹の飾りの付いたごく薄い皮の靴を履き、腕には宝石の代わりに金の腕輪や柄を嵌め、首や脚の回りに貴石のいっぱい付いた重さ3リブラの輪を嵌めている。

公娼は、全土に散らばっており自分の家を持っているから、男が望むどこにでもすぐ見付かる。家には油・軟膏・香水その他の芳香剤を置いている。たくさ

んの媚や言葉で、それぞれ年齢に応じて男を巧みに愛撫する。それにとっても熟練しており、男を歓びに導く大いなる師匠である。またここから、インド人のある種の忌むべき悪徳が生じる。女たちの髪型は様々であるが、大部分は髪の毛を絹紐で編み、金の細工のあるヴェールを被っている。他のところでは、髪の毛を頭の真ん中に集めて一つにし、様々な色の絹の房をそこに結び、それを房と一緒に裏返すと頭の周りに垂れるようになっている。他の女たちは黒いかつらをしており、黒いほど美しいとみなされる。また他のものたちは、何枚かの様々な色の葉で頭を覆っている。女たちは、カタイオの者をのぞいて誰も顔を洗う習慣がない。内インドでは男は女を1人以上持つことは許されていないが、他のところでは望むだけ持つことができる。ただし、異端ネストリウスから教義を得たキリスト教徒を除く（ネストリウス教徒の名はここからである）。彼らはインド全体に散らばり、ただ一人の女と暮らす。

#### 41 死者の埋葬におけるインド人の違い、中インドでは夫が死ぬと妻は生きてまま自ら焼け死ぬ

インド人はみな、死者を同じ様には埋葬しない。第一のインド人は、埋葬の立派さ・儀式・豪華さで他に勝る。地に穴を掘り、周りをたくさんの飾りで囲い、大量の金と豪華な衣服のいっぱい詰まった棕櫚の葉の上に死体を置き、あたかも地獄で使えるようにというように金の指輪を残す。そして穴の入り口は誰も開けられないように壁で塞ぎ、その上を瓦で丸く覆って、水がそこに流れ込んで埋葬したものを傷めないようにする。こうすると死体はより長期間保存される。

中インドでは死体は焼かれるが、多くの場合妻が、結婚の状態に応じて一人あるいは二人、その同じ火の中で生きてまま焼け死ぬ。法による第1の正妻は、たとえその死者の唯一の妻であっても焼身を義務付けられている。人々は第1の妻の他に何人か捕まえ、その中の誰かと夫の死の際にはその葬儀を執り行うべしとの契約を結ぶ。これは彼らの間では大きな名誉とみなされている。夫が死ぬと、とても豪華に飾られた寝台の上に最良の衣装を着せて置き、その回りと上に香木を置いて火をつける。次いで妻が、自分の一番大切な衣装を着飾って、笛・太鼓・フルートその他の楽器に囲まれて、大勢とともに、彼女も

また楽し気な顔付きでやって来、夫を焼く火の回りを歩く。そこには、高価な布で華やかに飾られた壇の上にバンカーニの呼ばれるかの司祭の 1 人がいて、優しい言葉で彼女を慰め、死を恐れぬよう、それどころか短く虚しい現世の生を蔑むよう言い聞かせ、死後夫とともにたくさんの喜びと無限の富と高価な衣装を、その他無数のものとともに獲得するのだと約束する。彼女は、何度も火の周りを回り終えるとかの司祭の壇の傍に行き、彼は絶えず彼女を元気づけ、彼女は衣服を脱いで裸になり、その前には彼らの習わしに従って体をととてもよく洗い、とても薄く白いシートに身をくるみ、司祭が彼女を説得したり励ましたりして、彼女自ら火の中に身を投げる。そして、時として起きることだが、火の中にいる他の女たちが奇妙な行動をし苦しんでいるのを見て、また火の外に逃げ出したがっているように見えて、女がこれをするのを怖がると、また時にこの恐ろしい恐怖から卒倒するのだが、近くに居合わせた者たちが女が火の中に身を投げるのを助けるか、あるいは無理やり力づくで投げ込む。体が焼けると灰を拾って壺に入れ、立派な記念碑を建て、そこにその壺を収める。しかる後たくさんの様々なやり方で彼女たちの夫を悼む。

#### 42 死者およびその埋葬の仕方にまつわる内インディアの儀式について

内インディアの者たちは、誰かが死ぬと頭に袋を被る。また別の者たちは、道の真ん中に何本か長い棒を立て、その天辺に色を塗って切った地面まで垂れる紙を張り付け、そこに 3 日いて泣き、ある種の金属製の楽器を鳴らしながら、神への愛のためにさる食べ物を貧者に施す。さらに 3 日続けて家族全員で泣くのだが、その間食事を作らず、近所のものが死者の家にやって来て料理した物を外から運んで来る。死者の親戚・友人は、その日々悼みの印しに口に苦い葉を一枚銜える。息子たちは父あるいは母が死ぬと、まる 1 年間衣服を替えず、日に 1 度以上食べず、爪も髪も髭も切らない。多くの女たちは服を臍まで脱いで死者の周りにいて、「アイ、アイ」と叫びながら、爪で顔を引っ掻き、拳で胸を叩く。その後一人が立ち上がり、死者の讃えを歌うようにして全て述べ始める。周りにいた他の女たちは、彼女らも歌を歌いながら、また特に死者が何か称賛に値することを行なった場所とやり方を全て語りながら応える。多くの者はすぐに死者の灰を金か銀の壺に入れ、かの司祭の勧めにより、偶像に捧げら

れたという場所に持って行く。そこには外からは誰も近づくことは出来ない。

#### 43 バンカーニと呼ばれる司祭たちの暮らしと習わしについて

司祭であるバンカーニは命あるものは口にせず、動物の中で人間に最も有益なのは牛だ、荷を運ぶのに使役するから、と言う。また、だからそれを殺して食べるのは罪だと言う。これら司祭は、米・野菜・実・果物を食べて生きる。女を1人以上娶らず、その女は夫が死ぬとその首の下に腕を差し入れて一緒に焼身する。火の中でもこのようにぴったりとじっとして、わずかな苦痛の印しも見せない。

#### 44 ブラミニと呼ばれる哲学者の一派の生と研究について、彼らの迷信について

全インドにブラミニ [バラモン] と呼ばれる哲学者の一派がおり、占星術に献身している。未来のことを予言することが出来るよう大いに研究している。正直で聖なる暮らしと善き習わしの者たちであり、その中には300歳だった者がいたという。その者は奇蹟とみなされ、どこへ行こうと、驚くべき注目すべきこととして子供たちがその後について来たという。彼らの多くは土占いの術を使い、その知識と技に精通しており、わずかな時間のうちに未来のことをまるですでに起こったかのように予言することが出来る。また、魔除けや悪魔的な魔術に耽り、望むときに嵐を起こしたり、反対に空を鎮めて晴れさせたりする。そのため彼らの多くは隠れて食事し、誰にも見られることを望まず、悪意の目で惑わされないかと疑う。それほど迷信深い。

#### 45 さる船主が旅に順風を得るためにした悪魔祓いについて

かのニコロは、次のことを本当のことと断言した：さる船主が、とても凧いだ海にあって船員とともにそこにあまりにも長く留まることを恐れ、木の脚の卓を用意させ、そこには多くの企みがなされていたが、ムティアムという神を何度も呼び出していると、その瞬間悪魔が一人のアラビアの男に取り憑いた。悪魔は、彼が大声で叫び跳ね船中を気狂いのように走り回るようにさせた。そして、卓のところに来ると炭をいくつか取って食べ、鶏の血を飲みたいと求めた

ので一羽が提供され、(咽喉を切って)その血を飲み、次いでそれを捨てると、彼らは何を望むか尋ねた。「風」との答えがあった。で彼は、3日の内に順風が与えられると約束し、それで安全に港に着くことが出来、どの方角からそれが来るか手で示し、やって来る激しさを受け止めるために入念に気を付けて準備しておくよう警告した。言い終わると、そのアラビア人は半分死んだように床に倒れ、自分が言ったりしたことについては後で何も思い出さなかった。かくて、彼が予言した時に風が到来し、数日でうまく港に着くことが出来たのだった。

#### 46 インディアの航海者はどの星で航行するか、彼らの船の形について

インディアの航海者は、南の方角にある南極の星で航行する。我々の北極星はめったに見られないし、彼らは方位磁針で航海せず、上記の星が高いところにあるか低いところにあるかによって決める。これを彼らはある種の器具でもって行い、同じく昼と夜の歩み、および一つの場所から他の場所への距離を測る。こうして彼らは、海にあって自分たちがどこにいるのかを知る。いくつかの船は2千ボッテ [樽] の容量に造り、我々のより大きく、4枚の帆と同数のマストを持つ。回りには、海の波の打撃によりよく抵抗できるよう重ねて打ち付けられた3枚の板があり、その波と激しく戦う。これらの船は [船底が] 小さな部屋に分かれており、その一つが壊れても他のは無事なままになるような構造になっており、そのまま旅を続けることが出来る。<sup>1</sup>

#### 47 インディアではどこでも偶像が崇拜されること、偶像に捧げられた寺院について、偶像の形について、偶像に献身するやり方について

インディアではどこでも偶像が崇拜され、それらのために我々のと似ていなくはない教会を建てる。またその中には画かれた像がいっぱいある。その祭礼の日には花や枝をもって崇める。偶像は、金か銀か石か象牙で造られており、そのいくつかは60ピエディの高さがある。それにどのように献身するかは、彼らの間でとても違いがある：ある者は、寺院に入る前に朝に1回と夕べに1回清水で体を洗う。ある者は、地面に腹ばいになり、少し進むたびに祈りを唱え、地面に口付けする。他の者は、アロエの樹か同類の他の香料で偶像に献身

する。

ガンジス川からこちらのインドには鐘はないが、その代わりに真鍮の盤がいくつかあり、それを打ち合わせて音をたてる。偶像への捧げものは、昔の異教徒の習慣にのっとった食べ物で、その後貧者が食べるよう配る。

#### 48 カムバイア市である者たちが偶像に身を捧げるために自らの意思で行う奇怪な死について

カムバイア市では、司祭が偶像の前で民衆に説教をし、何らかの著しい奉仕をなすよう説き、なしうる最も有難いこと、彼岸の生で最も大きな報酬が結果するものは、一人の人間がそれへの愛のために死なんと欲し、自らを殺めて死ぬ時だ、と説く。すると、その言葉の大きな力と効果により、多くの者が決然とこれに身を捧げんとやって来る。彼らはすぐに舞台の上に導かれ、そこでいくつかの儀式が行われ、彼らの首のまわりに太い鉄の首輪が当てがわれる。その外側は丸いが、内側は数珠のようにになっている。また、その首輪の前の部分には鎖が胸まで垂れ下がっていて、その中に身を置いて座り、脚を引っ込める。その中に足を置き、司祭が何か言葉を発すると、全民衆の前にいた者たちが、力いっぱいその足を引っ張る。そして男が顔をもたげると、すぐに頭が胴体から離れる。このようにして偶像に自らの命を犠牲に捧げ、そして聖者とみなされるのである。

#### 49 ビジナガルで、神々に飲んでもらうために、信仰の熱意に動かされて自ら望んで行う哀れな死について

ビジナガルでは、年のある時期に、非常な厳かさと多数の群衆の中を、2台の山車の間に偶像を一つ載せて全市内を運んで回る風習がある。山車の上にはとても可愛い娘たちがいて、偶像を讃えて無数の歌を歌う。そして、多数の者がその信仰への献身に動かされてその山車の前の地面に身を投げる。山車は、彼らの背の上を通り、その骨を全て砕く。彼らは、この形での死は神々に嘉されるのだと断言する。また別の者たちは、肋骨の間に穴を開けてそこに綱を通し、それを山車に結び付け、それに引っ張られて哀れに生を終える。そして、この形の死に方は神々への感謝に満ちた捧げ物なのだという。

## 50 インディア人が年に行う 3種の盛大な祭礼について、さらにその他の三つについて

彼らは年に三つの盛大な祭礼を行う。そのそれぞれで、どの世代の男も女も新しい服を着、まず海か川の水で身を清め、三日間ずっと歌い踊り宴すること以外何もしない。二番目の祭礼では、一日中夜も昼も寺院の内にも外にもごま油でたくさんの蠟燭を灯す。三番目の祭りでは、小船のマストほどの大きさの木を何本か道中に立て、その天辺から地面まで金糸を織り込んだ布をいくつか垂らし、その木の上には9日の間ずっと顔立ちがよく慈悲深く献身的な男がいて、大いに喜んで民のために神に祈り、恩恵と慈悲を神に嘆願する。この男に向けて群衆が皆、オレンジ・レモンその他においも味も良い果物を投げつけ、男は我慢してこれに堪える。これら以外に、彼らは年に3日の祭日を持つ。その日には、その目的のために用意された黄色い水で互いに水をかけあう。王も女王も同じ水を浴びる。これは楽しみのためで、皆が遊びに戯れる。

## 51 彼らの婚礼・歌・音楽・大宴会・踊りについて、彼らにはない種類の果物について

婚礼は、歌・宴・踊、ラッパその他の楽器を、オルガンを除いて我々と同じように用いて行う。彼らの宴会はとても費用が掛かっており、何日何晩も続き、歌い奏で踊ること以外何もしない。また、我々のさる所で習わしになっているように、歌いながらぐるぐると舞う。別の者たちは、2人ずつになって順に長く踊り、交代する前に前の者がとてもよく色塗られた棒を二本手に持っていて、それを次に来る者に手渡す。こうして、互いに出会う度に交換する。この行いは彼らにはとても美しいものに見える。ガンジス川より向こうの上インディア以外、風呂は使わない。しかし、他のものは皆日に何度も冷たい水で体を洗う。油も、モモ・ナシ・サ克蘭ボ・スモモ・リンゴといった我々のところの果物も持たない。ブドウの樹はごく少なく、上にも述べたごとく一か所にしかない。

## 52 プディフェタニア地方に生えるさる樹の不思議な効能について、アブニ



### ガロという山にあるダイヤモンドを採る方法について、他の宝石を見付ける方法について

彼に語られたところによると、プディフェタニア地方にさる実のない樹があり、高さ地上 3 ブラッチア、恥らいの樹と呼ばれ、人がそれに近づくと枝が萎み、離れると開くとのことである。そうしたことは、さほど信じ難いというわけではない。水中で草のように育つ海綿や海イラクサは、同じようにするから<sup>2</sup>。ビジナガル市から北へ歩いて 15 日行程のところ、彼に語られたところによると、アブニガロという山があり、毒のある獣がいる沼にすっかり囲まれており、山には蛇がいっぱいいるのだが、そこにダイヤモンドが見つかる。そのためおいそれと近寄ることは出来ないが、人は次のような巧妙な手を考え出した。すなわち、近くにそれよりも高い山があり、年のある時期村人たちは牛を捕まえて切り刻み、その熱くて血がいっぱい付いた肉を、専用の石弓でもってそのダイヤモンドの山に投げ込む。肉は地面に落ちて、ダイヤモンドが突き刺さる。飛んできたワシやタカがそれを見てそこに舞い降り、別の山に運び、そこで蛇から安全に食べることが出来る。その後、そこに見張っていた人間が鳥が肉を食べた場所を探し、それから落ちたダイヤモンドを拾う。<sup>3</sup>

他の宝石は、見付けるのはそこまで困難ではない。砂山の下に行き、確実に見付かると分かっている場所を、砂交じりの水が出てくるところまで掘る。その砂を専用の篩に入れて水で洗う。すると砂が濾されて石が残る。これが、彼に語られたその地方の宝石を掘って見付ける方法である。君主はそこに、掘る者に対しても監督する者に対しても盗まないよう多数の見張りを置き、衣服の中まで体中を探させる。盗まれないようこうしてあらゆる手立てを尽くす。

### 53 1年は何か月か、紀元はいつから始まるか、彼らの使う貨幣その他について

1 年は 12 か月で、それを 12 の天体の名で呼ぶ。彼らの紀元と年次は様々だが、その大部分は世界で遍く平和があったオクタウィアヌス帝の時に始まる。そして、今は紀元 1490 年だと言うが、我々の 1400 年にあたる。

いくつかの地域には貨幣がなく、その代わりに我々が猫の目と呼ぶ石を使い、別の所では針よりも少し太い鉄を、また別の所では上に君主の名を書いた紙を

お金として使う。

第1 インドニアのいくつかの地では、ヴェネツィアドゥカート金貨、別の所では1フィオリン金貨の倍と半分の重さのある金の小片、また別の所では銀と銅の硬貨が、さらに別の所ではさる重さに造られた金の小片が使われる。

#### 54 インドニア人が戦で町を攻めるために使う武器の種類について、彼らの書き方と紙の代わりに使う物について

第1 インドニアの者たちは、戦で投げ槍・刀・腕輪・小盾・弓矢・兜・鎖服・鎧を用いる。より内陸部の山の方にいる者たちは、石弓・白砲その他の町を攻撃する道具をたくさん持っている。また、我々フランク人とその他全ての人種を盲いと呼び、自分たちだけが二つの眼で見、我々は一つだけで見ると言い、自分たちは他のだれよりも思慮深いと言う。

カムバイアの者たちだけは紙に書く習わしがあるが、他の者たちは木の葉に書き、それをきれいな本にする。書き方は、我々のようでもヘブライ人のようでもなく、紙に縦に沿ってつまり上から下に書く。彼らの間には様々な言語がある。多くの奴隷を有する。金を払えぬ者は、貸主に奴隷として与えられる。

#### 55 何らかの過ちの罪に問われた罪人が、それに対する十分な証人を見付けられないとき科される誓約の種類について

何らかの正義の罪に該当し、それに対する十分な証人を見付けられない時は、罰を受けさせその誓いをする事が出来る。それには三つのやり方がある。一つは、その者を偶像のところに連れてこさせ、自分は無罪だとそれに誓う。そこに灼熱した大斧が用意されており、誓いが終わるとその者はその刃を舐め、無傷だと罪を解かれる。二つ目は、罪人は手にしばらく熱い鉄を持つことを強いられる。どこか少しでも火傷すると悪人として罰せられ、火傷しないと放免される。三つ目の方法は、彼らの間でより一般に行なわれているもので、偶像の前に煮立ったバターのいっぱい入った鍋を置き、誓うことのある罪人はその中に指を二本入れる。その指はすぐに布切れで縛られ、取り外せないように封印する。そして三日後にそれを解き、指のどこかが傷ついているとしかるべき

罰を科す。そうでない場合は、自由に放免する。

#### 56 インディアにはペストも他の病もないこと、そこにいる無数の民衆について、大ジャワに見付かるさる樹の効能について

インドニアにはペストは全くないし、我々のところで人々を苦しめる病気も患いも大部分彼らは知らない、彼らのつつましやかで節約的な暮らしはそこから由来する。そのため人々や国民はこれらの国では無数であり、人が想像し得る以上に多く、多くの場合一つの戦いに百万以上の人間が会する。[彼は] 武事にまつわる次の事実を目撃したと言う。それによると、勝者は戦利品として金と絹の紐を積んだ 12 台の車を家に持ち帰った。それは死者の頭から切り取ったもので、彼らはそれで髪の毛を杯の上に結び付けるのを常とする。また言うに、彼はただ観戦するために彼らとともに戦にあったのだが、外国人と分かって双方から無事放免された、と。

ジャワの大島にさる樹が生えるのを聞いたと言う。その樹は非常に珍しく、その中にはとても細い鉄の棒があり、長さは木の幹と同じで、その鉄の一片は、それを身に帯びる者は肉に触っても他の鉄で傷つけられないという効能を持つ。そのため、彼らの多くは肉を開いて皮膚と皮膚の間にそれを縫い込む。そして、とても大切にす。<sup>4</sup>

#### 57 不死鳥について、いかに死から再生するか。アロタンと呼ばれる川で捕まる魚が、手に持っているとき引き起こすこと

不死鳥と呼ばれる鳥について語られることは、お伽話と取るべきではないと彼は言っていた。彼に断言されたところによると、内インドニアの最後の国境のところに、セメンダと呼ばれる一羽の鳥がおり、三つの小さいフルーツのようになった嘴をしており、それが穴で一つになっていて、自分の死期が来ると小さな枝をたくさん巣に運び、その上に身を横たえる。そして、その嘴のフルーツのメロディーとともに歌い、とても甘味なのでそれを聞く者に驚くべき喜びをもたらす。そのあと羽根を強く打って火を起し、自ら焼けるがままになる。その灰から間もなく一匹の虫が生じ、それからかの鳥が再び生まれる。その地の住民は、その嘴が創られている形を真似て、とても甘味で快い音の鳴る楽器

を作り、その楽器の音にニコロはすっかりうっとりとなった。かの鳥について以上のことが何人かのインディア人から彼に語られた。かの楽器の発明はその鳥から得られたのだった。

第2 インディアにあるゼイラム島にアロタンなる川があり、魚がいっぱいいて難なく手で捕まえることができる。その魚をしばらく手に持っているると熱がその者を襲い、放すと回復する。これを彼らは偶像に帰すが、我々にすれば自然なことである。我々のところの雷魚と呼ばれる魚に起こることと同じで、手で触ると手が麻痺し痺れるからである。

以上は全て、至高の教皇の命によりその秘書、私ことフィレンツェ人ポッジョにニコロから語られたことである。これを私は、全き真実と熱意でもって、何も付け加えることも削ることもなく、しかし歴史を書き記す者の秩序と概念を用いながら、知りえる最善を書き現し、彼が語った通りに書き留めんと願った。真に私は、彼が極めて厳粛かつ慎重に話すのを聞いたので、誰か他の者が彼の話をより詳しく聞くことができたか、私は知らない。また、彼が嘘をついているとは見えず、全き真摯さと忠実さでもって語っていたこと確実である。この者は、今を去ることずっと以前、ガンジス川を伝ってカタイオ国の海の面したザイトンなる港にまで至り<sup>5</sup>、そこから大と小のジャワ島そしてタプロバーナ島まで来た。そこは、記録にある限り、皇帝ティベリウスの時何人かが嵐でそこに運ばれたという他に来った者はない<sup>6</sup>。かくも偉大にして讃嘆すべきこれらのことは、後世の者がこれを知り知識を得られるよう、書き記して知られるに値するものである。

1 Cf. マルコ・ポーロ『世界の記』Ch. 158「インディア海の船」。

2 原文 *che le spugne e urtiche marine … non faccino il simile.*

3 Cf. マルコ・ポーロ Ch. 175「ムトフィリ」。

4 Cf. マルコ・ポーロ Ch. 166「ジパング」(2)。

5 コンティはカタイ・マンジにまで至っていない。

6 前半註2参照。

7 フラ・マウロ図 8 ガスタルディ図：これらについても次号で取り上げる。



図6 フラ・マウロ図 15世紀半ば頃 ヴェネツィア サン・マルコ図書館<sup>7</sup>

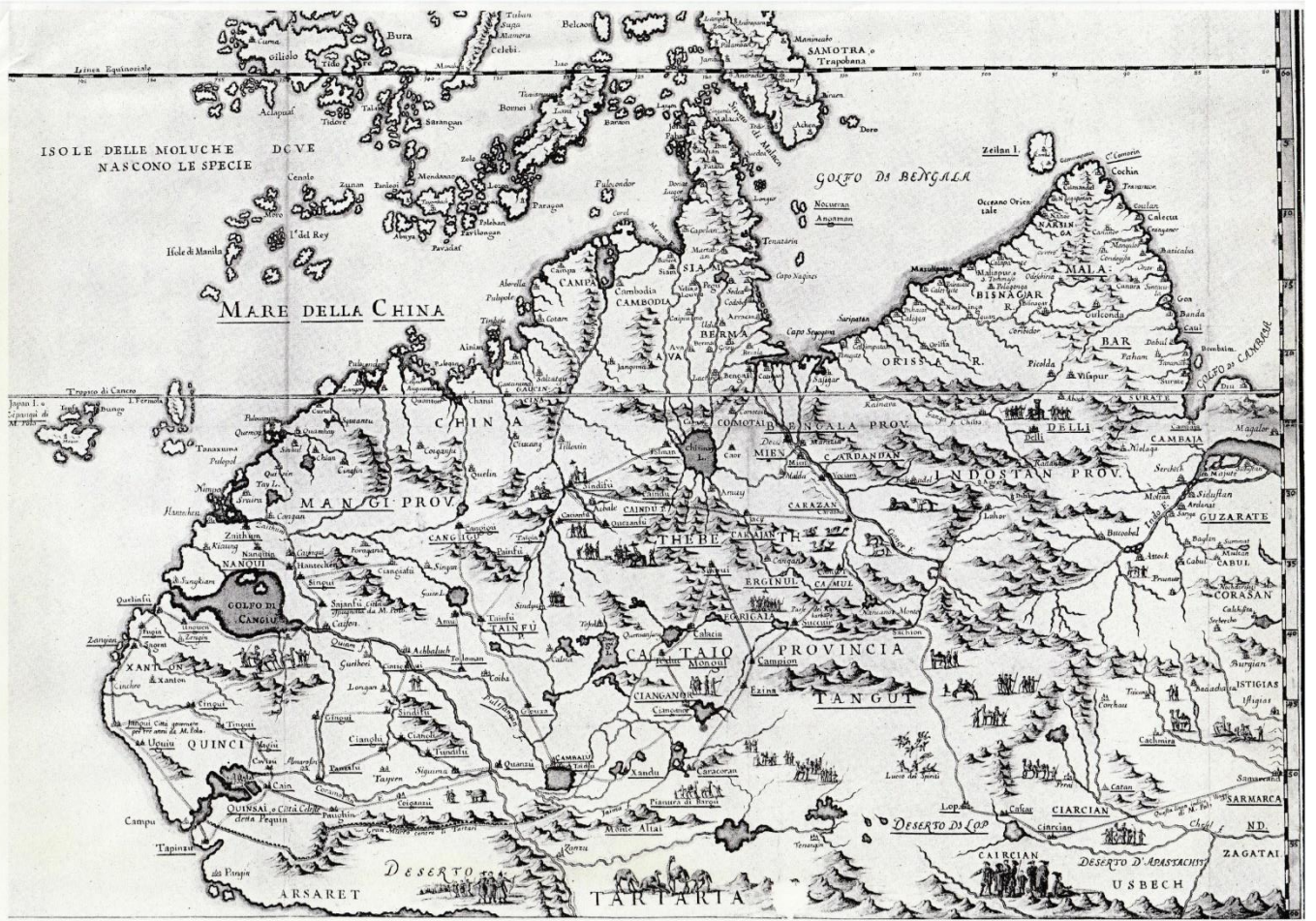


図7 ガスタルディ図（アジア）（1553，ヴェネツィア 総督宮盾の間）<sup>8</sup>